16 世紀のサルマチア論におけるアジアとヨーロッパ
―マチェイ・ミェホヴィータ『両サルマチア論』をめぐって―

小山　哲

1．形容詞化する「ヨーロッパ」
――ヨーロッパ概念史のなかの『両サルマチア論』

いまではこの分野における古典的名著ともいうべきデニス・ヘイ『ヨーロッパ、ひとつの理念の出現』のなかに、「ヨーロッパ」の形容詞形（Europaeus, Europensis）の用法の歴史的変遷に触れた箇所がある[1)]。ヘイによれば、「ヨーロッパ」という地名の形容詞形は古典古代のテキストにもみられるが一般的とはいえず、中世に入るとほとんど用いられなくなる。「ヨーロッパ」概念が形容詞としてしばしば使用されるようになるのは中世後期のことであり、その初期の用例は 15 世紀の教皇ピウス 2 世（エネア・シルヴィオ・ピッコローミニ）の著作に見られる。人文主義的教養をもって知られるピウス 2 世は、中世的なラテン語の用法から離れて、「キリスト教圏」（Christianitas）の代替語として「ヨーロッパ」・「ヨーロッパの」（Europa, Europaeus）を好んで用いた。中世末の「ヨーロッパ」概念の台頭は古代ローマ理念の復興とも結びついたルネサンス的現象であったが、その形容詞形の使用は、古代の用語法の忠実な再現というよりも、人文主義者による新たな言語的創造であったというべきかもしれない。

この「ヨーロッパ」の形容詞形は、16 世紀に入ると、活版印刷術によって量産された書物をつうじてヨーロッパ各地に急速に普及する。そのような出版物の最初の例としてヘイが挙げるのが、ポーランドの人文主義者マチェイ・ミェホヴィータ（マチェイ・ズ・ミェホヴァ）の著作『アジアとヨーロッパの二つのサルマチア、およびその風土と住民についての論考』[2)]（以下、『両サルマチア論』と記す）である[3)]。

この著作は、1517 年にクラクフで初版が刊行された[4)]のち、翌 18 年

にアウクスブルクで再版され、さらに1521年にタイトルを変えて再びクラクフで出版された[5]。また、ヨハン・エックによるドイツ語訳（1518、1534年刊）、アンジェイ・グラベルによるポーランド語訳（1535、1541、1545年刊）、アンニバレ・マッギによるイタリア語訳（1550、1561、1562、1584年刊）、オランダ語訳（翻訳者、刊行年不明）が出版され、オリジナルのラテン語のテキストも16世紀のあいだにさらに5版を重ねている（1532、1537、1542、1582、1588年）[6]。このようにミェホヴィータのサルマチア地誌は、その初版刊行直後から、ポーランドのみならずヨーロッパ各地で注目を集め、当時の知識人によって広く読まれた[7]。ポーランド人の著書が西欧でこれほど多くの読者に迎えられたのは、それ以前にはないことであった[8]。つまり、『両サルマチア論』は、「ヨーロッパ」の形容詞形（Europianus）をタイトルに用いている点で当時の新しい思潮を反映していただけでなく、その流通範囲がヨーロッパ東部から地中海・大西洋岸に及んでいたという点においても、すぐれて「ヨーロッパ的な」書物だったのである。このような先駆的な著作が、ラテン＝カトリック文化圏の東の辺境にいちはやく出現したのはなぜなのか。残念ながらヘイは書名に言及するのみで、著作の内容や成立の事情については立ち入った検討を加えていない。

『両サルマチア論』は、いかなる意図をもって書かれ、なにを読者に伝えようとしたのか。「サルマチア」・「ヨーロッパ」・「アジア」という3つの地域概念のあいだにはどのような関係が想定され、それは現実に存在する諸民族の分布や諸国家の領土と空間的にどのように結びついていたのか。また、その叙述のなかで「ヨーロッパ」概念（および、それと並んで用いられている「アジア」概念）はどのような意味内容を伴って用いられていたのか。

以下、『両サルマチア論』の内容を概観しながら、これらの問題について考えてみよう[9]。

２.『両サルマチア論』の構成と内容

１）『両サルマチア論』の構成とその問題点

『両サルマチア論』初版の体裁は四つ折り版、34葉で、むしろ小冊子と呼ぶべきものだが、著者ミェホヴィータ[10]の筆は中央ユーラシアか

表　マチェイ・ミェホヴィータ『両サルマチア論』の構成

※　〔　〕内は 1521 年版において追加された部分、ないし付加された章題を示す。

オロモウツ司教スタニスラウス・トゥルソヌスへの献辞
〔リンチェピン司教座聖堂参事会員ヨハンネス・マグヌス（イェンス・マンソン）のミェホヴィータ宛書簡〕
〔ミェホヴィータのヨハンネス・マグヌス宛書簡〕

第 1 巻　〔アジア・サルマチアについて〕
- 第 1 論考　第 1 章　2 つのサルマチアが存在することについて
  - 第 2 章　タタールの起源と到来について
  - 第 3 章　タタールによるポーランドとハンガリーの恐るべき破壊について
  - 第 4 章　タタールの支配者バトゥによるハンガリーの血塗られた破壊について
  - 第 5 章　いかにして教皇インノケンティウス 4 世は、タタールのハンがキリスト教徒を迫害しないようにするために、ハンに使節を送ったか、また、いかにしてハンはマホメットの信仰を受け入れたか
  - 第 6 章　タタールの慣習について、また、彼らの地にあるものについて
  - 第 7 章　ザヴォルガ・タタールが占める領域について
  - 第 8 章　ヴォルガ川の彼方の支配者たちの出自について
  - 第 9 章　スキタイ人は不穏であり、常に略奪の機会をうかがっていることについて

- 第 2 論考　第 1 章　現在タルタリアと呼ばれているスキティアにはいかなる人びとが住んでいるか
  - 第 2 章　ゴート人について
  - 第 3 章　アラン人、ヴァンダル人、スウェヴィ人について
  - 第 4 章　ヴァンダル人、アラン人、スウェヴィ人について、続き
  - 第 5 章　ユグル人について

- 第 3 論考　一族として結びついたタタールの勢力拡大について
  - 第 1 章　トルコ人について
  - 第 2 章　ウランのタタールすなわちペレコプ・タタールについて
  - 第 3 章　カザン・タタールとノガイ・タタールについて

第 2 巻
- 第 1 論考　より上位のヨーロッパ・サルマチアの記述
  - 第 1 章　ルシについて、いかなる部分に分かれ、いかなる富を有し、そこに何があるか
  - 第 2 章　リトアニアとジュムチについて
  - 第 3 章　リトアニア大公国の範囲について、また、この国にあるものについて

第 2 章　モスクワ公によって征服されたスキティアの諸地方、ペルム、バシキール、ユグリア、カレリアについて

〔ミェホヴィータのクラクフ市参事会員ヤン・ハレル宛書簡〕

らアフリカにまで及んでおり、その記述がカヴァーする空間的範囲は広大である（表「マチェイ・ミェホヴィータ『両サルマチア論』の構成」を参照）。

本文は 2 巻から成り、第 1 巻がアジア・サルマチア論、第 2 巻がヨーロッパ・サルマチア論に相当する。第 1 巻（21 葉、3 論考を含む）と第 2 巻（11 葉、2 論考を含む）は、分量的にも構成的にもバランスがとれているとは言いがたいが、この外見上の比率がそのまま内容的にもアジアとヨーロッパの記述の比重に対応しているわけではない。というのも、ユーラシア大陸を移動する諸民族の動きを追ううちに、ミェホヴィータの語りは、しばしば書物の構成の枠を破って、アジアとヨーロッパのあいだを自由に往き来しているからである。

『両サルマチア論』の叙述に同じ内容の繰り返しや混乱した箇所が少なくなく、構成上にも齟齬がみられることは、研究者によってしばしば問題とされてきた。ヘンリク・バリチとカロル・ブチェクは、ミェホヴィータが十分な調査や推敲の余裕なしに急いで執筆したものとみなし、そこにこの書物が刊行された意図を探る手がかりを見出している。ただし、執筆を促した要因については、両者の見解は一致していない[11]。

バリチは、1516 年末から翌年にかけて、スフォルツァ家のボナとポーランド国王ジグムント 1 世の婚約が成立したことを背景として指摘する。『両サルマチア論』には、イタリアから王妃を迎えるにあたって、ヨーロッパ東部の正確な情報を西欧諸国に提供する意図があったと考えるのである。バリチはまた、首座大司教ヤン・ワスキとミェホヴィータの関係を重視し、『両サルマチア論』が、西欧におけるポーランド観の誤りを正そうとしたワスキの意図を実現する書物であったと主張する[12]。これに対してブチェクは、1516 年に皇帝マクシミリアン 1 世によってジギスムント・フォン・ヘルバーシュタインがポーランド経由でモスクワに派遣されたことに注目する。ヘルバーシュタインはヨーロッパ東部の地誌に強い関心をもっており、このドイツ人の使節派遣がミェホヴィータを

刺戟して筆をとらせたと推測するのである[13]。

いまひとつの背景として、ヨーロッパの統治者や知識人の目をヨーロッパ外世界へと向けさせた「地理上の発見」の時代の空気も見逃せない。『両サルマチア論』の巻頭に置かれた献辞を、ミェホヴィータは次のように結んでいる。

> ポルトガル国王は、インドや大洋の彼方に人びとが暮す地域にまで広がる、世界の南の部分を世に知らしめました。同様に、北の大洋の岸に暮す人びとのいる世界の北の部分や、ポーランド国王がその武器と戦争によって到達するにいたったさらに東方の地が、万人の目に開かれますように[14]。

「サルマチア」は、ポーランドの東方に広がる、もうひとつの魅力的な「新世界」でもあったのである[15]。

いずれにしても『両サルマチア論』が、ヨーロッパ東部の辺境地域への関心の高まりと、西欧向けのプロパガンダの必要性を感じたポーランド王国の聖俗の指導者層からの要請に応えるかたちで、短期間に書かれたことはおそらく間違いない。

しかし、この著作の構成と内容の不一致は、たんなる推敲不足の結果という以上に、叙述の対象となる地域の両義的性格、言い換えれば、アジアとヨーロッパにまたがるサルマチアという境界的地域の特質から生じたものであるように思われる。続いて『両サルマチア論』の内容をテキストに即して検討してみよう。

2）地域の設定と「経験」にもとづく地誌の書き変え

ミェホヴィータは、古典古代の先例にしたがって、サルマチアを次のように区分する。

> 古代人は、2つのサルマチアがあるとした。ひとつはヨーロッパに、もうひとつはアジアに位置し、それらは互いに境を接している。ヨーロッパ・サルマチアには、ルシ人、リトアニア人、モスクワ人、およびこれらに隣接する人びとの住む地域がある。その範囲は、西はヴィスワ川に、東はタナイス川〔ドン川〕に達する。この地方に住む人びとは、かつてはゴート人と呼ばれた。アジア・サルマチアには現在、多くのタタールの部族が住みついており、その範囲

は、西はドン川すなわちタナイス川から、東はカスピ海に及ぶ[16]。

ヴィスワ川をヨーロッパ・サルマチアの西限とし、ドン川を両サルマチアの境界――したがってヨーロッパとアジアの境界――とするサルマチアの領域の設定は、プトレマイオスの記述と一致する[17]。この点では、ミェホヴィータのサルマチア認識は、15 世紀にはじまる「プトレマイオス・ルネサンス」の影響を色濃く反映していた[18]。しかし、言うまでもなく、プトレマイオスの記述は、ヨーロッパ東部の実態からはかけ離れたものであった。このため、『両サルマチア論』を執筆するにあたってミェホヴィータは、とくに 2 つの問題に直面することになった。ひとつは、サルマチアの気候や地形にかんする古典の記述が現実と大きく食い違っていること、いまひとつは、ミェホヴィータと同時代の諸民族の分布や国家の支配領域が、古代の地誌における地域区分と一致しないという問題である。

第 1 の気候と地形の問題にかんしては、ミェホヴィータの姿勢は、きわめて明快であった。オロモウツ司教トゥルソヌスに宛てた献辞のなかで、彼は次のように述べている。

> 尊厳なる司教殿、すでに多くの著述家たちが大小の著作のなかで世界について書き記しておりますが、サルマチアについては、誰にも知られていないかのように、何も言及しておりません。自らの著述や詩のなかでサルマチアについて後世の者に伝えている人びとも、古代の権威に圧倒されて明確なことを言わず、暗闇のなかをさまよってきました。彼らが、これらの記述のなかに、まったく存在しないものごとについての多くの作り話やおとぎ話を盛り込んでいることは、耐え難いことであります。たとえば彼らは、サルマチアの彼方にある北方洋の沿岸には、たいへん気候の穏やかなエリジウムの野があり、そこではいかなる苦しみもなく永遠に生命が続くと申しております。〔…〕これらの著者たちはまた、そこにはアンブロシアが育ち、人びとはその甘く香りのよい果汁を飲みながら楽園にいるように暮らしており、また、そこには人の心を引きつける黄金が大量にあると書いています。人びとがこの黄金を掘り出して運び出さないように、乗り手を馬ごと空に持ち上げて地面に投げ落とすことができるほど巨大な猛鳥グリフォンがそれを守っている、というのです。彼らはまた、太陽も月も星もそこではけっして沈むことなく、1 日中たいへん快く暖かいと

述べています。もちろん、これらはすべて、真実とはなんのかかわりもない作りごとです[19]。

サルマチアの北方の気候がきわめて寒冷であり楽園にはほど遠いこと、怪鳥グリフォンが守る黄金の存在も「おとぎ話」（fabula）にすぎないことは、『両サルマチア論』の本文のなかでも重ねて指摘される[20]。さらに、地理的辺境をめぐる言説にしばしば登場する異形の人びとの存在も、明確に否定される。

ゴティア、スウェーデン、フィンランド、ユグリアの彼方やカスピ海の彼方の北方には、怪物人間（monstrosi homines）、つまり、隻眼人、双頭人、犬頭人などはいない。そこに住んでいるのはわれわれと同様の人びとである。ただ、彼らは人口が少なく、広大な地域に散らばっており、つねに体を震えさせる寒さのために肌が青ざめた色をしている[21]。

もうひとつ、ミェホヴィータが力説するのは、プトレマイオスが記述しているサルマチア北方の山地――リパイア山脈（montes Riphaei）とヒュペルボレイア山脈（montes Hyperpobrei）――が実在しないという点である。

リパイア山脈とヒュペルボレイア山脈は、現実には、スキティアにもモスコヴィアにもその他いかなる場所にも存在しない。〔…〕尊敬すべき司教殿、まさにここに、リパイア山脈とヒュペルボレイア山脈について語る高名な著述家たちによって生み出された深い淵があるのです。あなたのいと高き権威が、あらゆる狡猾な学説に対して実際の経験（experientia rerum）を対置することによって、彼らの反駁から私をお守りくださいますように[22]。

架空の山脈の存在が否定されることによって、これらの山岳地帯に発するとみなされていたヨーロッパ東部の主要な河川の水源についても、古典の権威にもとづく従来の説が批判されることになった。

3 つの大河が、互いに近くから発している。すなわち、ドニエプル川、ドヴィナ川〔西ドヴィナ〕、ヴォルガ川である。これらの川は、平らで森の多い沼

地から流れ出しているのであって、ヒュペルボレイア山脈、リパイア山脈、その他のいかなる山地からも発していない。それらの山地は実際には存在しないのであり、ただ、ギリシア人たちが書きとめたために長らく実在するように思われ、誇らしげに仰々しく語られてきたのである[23]。

この山地と河川にかんする通説の批判は『両サルマチア論』のなかで繰り返し説かれており[24]、ミェホヴィータにとって重要な論点であったと考えられる。当時、プトレマイオスの記述にもとづいて刊行されたサルマチアの地図上では、これらの山地と河川はとりわけ目につくかたちで描かれていた（地図を参照）。ミェホヴィータが「経験」（experientia）[25]にもとづいて古典の権威に挑戦し、サルマチアの地誌を大きく書き変えたことは、のちにヨーロッパ東部の地理学史のなかで特筆される貢献となった[26]。

他方で、『両サルマチア論』の地誌的記述がなお多くの誤謬を含むものであったことも確かである。一例をあげれば、ミェホヴィータは、ヴォルガ川がカスピ海ではなく黒海に注ぐものとして記述している[27]。また、主要な地点の経緯度の認識が正確とはいえないこと、距離の把握が厳密さを欠いており、モスクワ大公国の国土の規模が実際よりかなり大きく記述されていることは、カロル・ブチェクの指摘するとおりである[28]。

3）両サルマチアの諸民族の系譜

地勢の記述にもまして多くの問題をはらんでいるのは、サルマチアの住民についての記述である。中世以降のヨーロッパ東部の歴史に登場する諸民族は、当然のことながら古代のテキストには記されていないため、中世の年代記作者やルネサンス期の人文主義者たちは、さまざまな工夫をこらして古代と同時代を結ぶ諸民族の系譜を創りださなければならなかった。ミェホヴィータもまた、諸民族の興亡と系譜関係について独自の理論を提起している。『両サルマチア論』の民族誌叙述は十分整理されているとは言えず、しばしば混乱した記述もみられるが、おおまかに言って、タタールを中心とするアジア・サルマチアの系譜論と、スラヴ人を中心とするヨーロッパ・サルマチアの系譜論の2つの系統に分けることができるであろう。

地図　プトレマイオスの記述にもとづくヨーロッパ・サルマチア
（ヨーロッパ第 8 図）

1540 年、バーゼルで刊行されたヨーロッパ・サルマチア地図。北東部にヒュペルボレイア山脈、北東部から南東方向に向かってリパイア山脈が位置し、主要な河川はこれらの山岳地帯から発しているように描かれている。

出典：Lucyna Szaniawska, *Sarmacja na mapach Ptolemeusza w edycjach jego "Geografii"*, Warszawa 1993, Mapa 62（書誌は s. 136-139）.

ミェホヴィータは、タタールがアジア・サルマチア土着の民族であるとする同時代人の説を、トゥルソヌスに宛てた献辞のなかで次のように否定する。

最近の著述家たちは、アジア・サルマチアの平原で暮らす恐るべきタタールの民（thartarorum gens terribilis）がこの土地から出た者であり、そこにずっと変わらずに住んでいたと述べております。しかるに、この民は 300 年ほど前に東方の地からアジア・サルマチアに新たにやって来たのであり、それ以前

にはまったく知られていなかったのです[29]。

『両サルマチア論』の第1巻第1論考の第2章から第4章は、13世紀のモンゴル軍のヨーロッパ東部への進出とそれにともなう戦闘の記述にあてられている。この部分の叙述においては、タタールが破壊し、略奪し、殺戮する集団であることが一貫して強調されている[30]。ミェホヴィータは、タタールが立ち去ったのちも、彼らが再び攻め寄せてくるのではないかと「全ヨーロッパが戦慄した」（tota Europa contremuit）と記す[31]。『両サルマチア論』におけるアジア・ヨーロッパ関係の認識は、全体として、東から西へと押し寄せる「恐るべきタタール」の記憶のうえに構築されているといってよい。

もっとも、西進してアジア・サルマチアに定着したタタールの歴史と現状にかんする『両サルマチア論』の記述は、かなり混乱したものである。ミェホヴィータはタタールのなかにザヴォルガ、ペレコプ、カザン、ノガイの4つのホルドを区別し、さらに支配者をもたない第5のホルドとしてコサック[32]を挙げる。このうち最も詳しく記述されているのはザヴォルガ（ヴォルガ川の東側）のタタールである。「ザヴォルガ・タタール」（thartari Zauolhensi）とはミェホヴィータの独自の呼称であり、その領域は、東はカスピ海まで、西はドン川・ヴォルガ川まで[33]、南は黒海とイベリア・アルバニア（それぞれほぼ今日のグルジア、アゼルバイジャンに相当する）の高い山脈（カフカス山脈）まで、北は広大な平原に開いているとされた[34]。サヴォルガ・ホルドは、『両サルマチア論』ではしばしば「チャガタイ・ホルド」と等置されている（horda Czahadairorum sive Zauolhensium）が、実際にはキプチャク＝ハン国の領域に相当するものと考えられる[35]。

ザヴォルガ・タタールの支配者（ウル・ハン Vlucham すなわち偉大なる支配者ないし皇帝 magnus dominus sive magnus imperator）の系譜についても、混乱がみられる。ミェホヴィータはチンギス（Cingkis）を初代とし、バトゥを第3代とするが、その次の第4代ハン（バトゥの息子）をテムル・クトルグ（Temir Kutlu）とし、さらにこの人物をティムール（Temerlanes）と混同している[36]。この取り違えは、『両サルマチア論』におけるトルコ史の叙述[37]にも混乱をもたらしている。ミェホヴィータは、このザヴォルガ・タタールの第4代ハンがオスマン帝国

の第 4 代皇帝バヤジットを破ったとする（1402 年のアンカラの戦いを指す）。他方で、ドナウ河畔でヨーロッパ諸侯軍を撃破したのはオスマン帝国の第 5 代皇帝アルピヌス（Alpinus）であるとも述べる[38]。これが 1396 年のニコポリスの戦いを指すとすれば、このときの勝者は第 4 代皇帝バヤジットでなければならない。

ミェホヴィータによれば、タタールの進出にさきだってアジア・サルマチア（ないしスキティア）に分布していたのは、まずアマゾン女族（Amazones）、次いでスキタイ人（Scytae）、さらにそれに次いでゴート人（Gotthi）[39]であった。ゴート人は、北方から侵入してきたユグル人（Iuhri）によってアジア・サルマチアを追われ、その一部は黒海沿岸にとどまったが、他の一派は西ゴート（Vissigotthi）、東ゴート（Ostrogotthi）に分かれてそれぞれイタリア、ガリア、ヒスパニアに至った[40]。他方、ユグル人も西に進み、アッティラのもとではフン族（Hugui）として知られ、やがてパンノニアに定着してハンガリー人（Hungari）と呼ばれるようになった[41]。

この一連の複雑な民族移動の連鎖の叙述のなかに、スラヴ人（Slavi）も登場する[42]。ミェホヴィータはスラヴ人をヴァンダル人（Vandali）と同一視し、この民族名をポーランドの伝説上の王女ヴァンダ（Wanda）、ヴァンダルス川（ヴィスワ川）と結びつけた[43]。したがってヴァンダル人の故地ヴァンダリアはポーランドを指すことになり（Vandalia seu Polonia）、ポーランド人がヴィスワ川周辺地域と本来的に強いつながりをもつことが示唆され、スラヴ人の土着性が強調されることになった[44]。また、スラヴ人はギリシア人と並んでノアの 3 人の息子のひとりヤペテ（ヤフェト）の子ヤワンの子孫であるとされ、スラヴ人のヨーロッパ諸民族の系譜への帰属が主張された[45]。

他方でミェホヴィータは、ヴァンダル人がゲルマン系であることも明言している（Vandali sunt et fuerunt populi germani）。このため、ヴァンダル人を介してスラヴ諸民族とゲルマン諸民族の区別は曖昧となり、西方のスウェヴィ人（Suevi）、ブルグント人（Burgundi）がポーランド人と同じ系譜になかに位置づけられることになった。同時にミェホヴィータは、これらスラヴ＝ゲルマン諸民族の起源を全体として東方のサルマチア人やスキタイ人の系譜から切り離そうとする。彼は次のように述べている。

ヴァンダル人、スウェヴィ人、ブルグント人は、ポーランド王国から、ポーランドの地から発している（Vandali, Suevi et Burgundi fuerunt de regno Poloniae, a locis Poloniae）のであり、彼らはこの地に住み、ここから呼称や名称を採り、ポーランド語を用いていたのである。〔…〕ヴァンダル人、スウェヴィ人、ブルグント人は、ゲルマン人であって、サルマチア人でもスキタイ人でもなかった（Vandali, Suevi et Burgundi germani et non Sarmatae neque Scitae fuerunt）[46]。

スラヴ人（なかでもとりわけポーランド人）の土着性・ヨーロッパ性・西方性を強調するこの民族系譜論は、当時、西欧の一部の論者にみられたスラヴ人の東方起源説に対する反論を意図したものと考えられる[47]。15 世紀の年代記作者ヤン・ドゥウゴシュ以来、ポーランド人の歴史的出自を古代サルマチア人に求める民族起源論が定着していった経緯[48]を念頭におくならば、逆にサルマチア人との関係を断ち切ることによってポーランド人の東方的性格を否定するミェホヴィータの系譜論は、中世末から近世にかけて書かれた一連のサルマチア論のなかでは異色であるといえよう。

『両サルマチア論』は、諸民族の系譜論のなかでポーランド人に特別な地位を与えている反面、奇妙なことに、実在するポーランド王国についてはまとまった記述をおこなっていない。ミェホヴィータは当時、『両サルマチア論』とは別に『ポーランド人の年代記』*Chronica Polonorum* の執筆を進めており[49]、書くための素材には困らなかったはずであるが、ヨーロッパ・サルマチア論に相当する第 2 巻で扱われているのはリトアニア大公国とモスクワ大公国の領域に限られ、国家としてのポーランドは叙述のなかにほとんど姿を現さない。この点について、タデウシュ・ウレヴィチは、プトレマイオスの地域区分を採用したことが障害となったのではないかと推測している[50]。たしかに、ヴィスワ川を西限とするプトレマイオスのヨーロッパ・サルマチアの領域設定は、ヴィスワ川の両岸にまたがるポーランド王国の領土を叙述する枠組みとしては適切なものではなかったであろう。

この問題を、後の世代のポーランドの人文主義者たちは、サルマチア人がヴィスワ川を越えて西に領域を広げたと解釈することによって解決した。たとえばマルチン・クロメルは次のように主張する。

この民〔ポーランド人〕は、サルマチアに発して、ヴィスワ川を渡り、ゲルマニアの、かつてはヴェント人とヴァンダル人が住んでいた地域に住みついた。そして、自らの住む領域と支配を南北に大きく押し広げた。その結果、サルマチア山地から北は上述の川の両岸まで、西はチェコとの境を隔てるズデーテンの森、さらにエルベ川に沿ってその河口まで、またヴィスルギ川すなわちヴェーゼル川の河口まで、またヴェント人の海すなわちバルト海まで広がるすべての地域が、その支配下に入った[51]。

この解釈は、プトレマイオスの地域概念から離れて、サルマチアの境界線を現実に存在するポーランド国家の領土や西スラヴ人の居住地域に合わせて引き直すことによって可能となった。これに対して、ミェホヴィータは、一方でプトレマイオスの地誌にみられる誤謬を「経験」にもとづいて鋭く批判しながらも、サルマチアの地理的範囲を同時代の政治的・民族的実態に即して変更することはしなかったのである。

3.「ヨーロッパ・サルマチア」のジレンマ

ミェホヴィータの『両サルマチア論』は、ヨーロッパ東部の空間認識の枠組みとしてプトレマイオスの地域区分をそのまま受け入れている点では、過渡的な性格の書物であった。しかし、実地の見聞にもとづかない地理的記述の問題点を大胆に指摘するその姿勢は、同時代の知識人に衝撃を与えた。

ドイツの人文主義者ウルリヒ・フォン・フッテンは、ヴィリバルト・ピルクハイマーに宛てて『両サルマチア論』を読んだ感想を書き送っている（1518 年 10 月 25 日付）。フッテンは、この小著に強い印象を受けたが、当初はその内容については半信半疑であった。しかし、皇帝マクシミリアン 1 世によって使節としてモスクワに派遣されたヘルバーシュタインから、ヴォルガ川の河口の位置を除けばミェホヴィータの記述は正確であり、リパイア山脈やヒュペルボレイア山脈はたしかに存在しないと聞いて、この書物の信憑性を確信したという[52]。ちなみに、フマニスムスの開花を讃えるフッテンの有名な科白――「おお、時代よ。おお、学問よ。生きることは喜びだ。ヴィリバルトよ、もう手を拱いているときではない。学問は栄え、才能は花ひらいている。聞け、汝、野蛮な者

らよ、罠にはまるがよい、追放を予期するがよい」――は、ピルクハイマー宛のこの書簡の末尾に記されたものであった[53]。「経験」にもとづいて古典の権威に挑戦したミェホヴィータのサルマチア地誌は、ドイツの人文主義者にとって、新たな知の時代の到来を告げる書でもあったのである。クロード・バックヴィスが、ミェホヴィータの『両サルマチア論』とコペルニクスの『天球回転論』に共通する知的姿勢を読み取っているのは、その限りでは理由のないことではない[54]。

他方で、『両サルマチア論』における民族誌叙述は、この書物に、実証的な地理学書としての側面とは異なる、もうひとつの側面があったことを示している。スラヴ人の東方起源論を否定し、ゲルマン人の系譜に結びつけることによってスラヴ諸民族の土着性・西方性を強調するミェホヴィータの民族系譜論は、実証的というよりは、政治的な言説としての性格を強く帯びたものであった。ヘンリク・バリチが指摘するように、イタリアから王妃を迎えるにあたって、ポーランド人のヨーロッパ的性格を強調することによって西欧におけるポーランド王国のイメージを刷新しようとする意図が著者の念頭にあったことは、十分考えられるであろう[55]。ミェホヴィータは、地理的領域としての「サルマチア」を維持する一方で、ポーランド人を「サルマチア人」から引き離し、ゲルマン諸民族と結びつけることによって、この課題に対処しようとした。しかし、その結果として、実在する民族の分布とも国家の支配領域とも対応しない「ヨーロッパ・サルマチア」の位置づけは、きわめて曖昧なものにならざるをえなかった。

冒頭で紹介したように、『両サルマチア論』はいちはやく「ヨーロッパ」の形容詞形をタイトルに用いた書物であった。しかし、逆説的にも、『両サルマチア論』における「サルマチア人」は、ヨーロッパの諸民族との系譜的つながりをもたない東方の民族として登場する。それだけでなく、この著作における「サルマチア」のイメージは、全体として「ヨーロッパ」よりはむしろ「アジア」に引きつけられたものになっている。寒冷で厳しい気候、広大な森と平原、魚の溢れる大河、そのなかで絶えず移動する異教徒の「野蛮人たち」（barbari）[56]が興亡を繰り返し、しばしば西進してヨーロッパを脅かす――それが『両サルマチア論』における「サルマチア」の基本的なイメージである。たしかに、プトレマイオスにもとづく地理的区分に加えて、アジア・サルマチアはイスラーム

教徒のタタールが支配する地域、ヨーロッパ・サルマチアは東方正教会も含めてキリスト教が広まった地域というおおまかな色分けはなされている。リトアニアについては、リトアニア人とリトアニア語のイタリア起源説が紹介され、ヨーロッパの諸民族の一員としての位置づけが与えられてもいる[57]。しかし、ミェホヴィータは他方で、ヨーロッパ・サルマチアにもタタールは定着しており[58]、意識を失うまで暴飲暴食する「有害な風習」や人身売買の慣習はリトアニア人、モスクワ人、タタールに共通してみられるとも指摘する[59]。ヨーロッパ・サルマチアは、地理的にはヨーロッパに区分されるものの、住民の構成や気質にかんしては非ヨーロッパ的・東方的な要素を多く含む地域として描かれるのである。

こうした点に目を向けるならば、ヨーロッパ側も含めてサルマチア全体の「アジア的」本質を語ることこそが、すぐれて「ヨーロッパ的」な著作である『両サルマチア論』の隠されたモチーフであったということもできよう。この書物におけるポーランド王国論の不在は、その意味で象徴的である。

注

1）Denys Hay, *Europe. The Emergence of an Idea*, Edinbourgh 1957, pp. 86-88, 106-107. 本書の概要については、江川温「西欧の民族史観とヨーロッパ・アイデンティティ」、谷川稔編『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』、山川出版社、2003 年、117-134 頁を参照。

2）Mathias de Miechow, *Tractatus de duabus Sarmatiis, Asianae et Europianae, et de contentis in eis*, Cracoviae 1517. タイトルの後半は、直訳すれば「およびそれら〔の地域〕に含まれるものについての」論考となるが、叙述の内容を考慮して本文のように訳した。

3）Hay, *op. cit.*, p. 106. ただし、ヘイの記している書名（*De Sarmatica Asiatica et Europaea*）は正確なものではない。

4）ヘイは『両サルマチア論』の刊行年を 1518 年としているが、初版の刊行はその前年である。

5）*Descriptio Sarmatiarum Asianae et Europianae et eorum, quae in eis continentur*, Cracoviae 1521.

6）『両サルマチア論』の書誌については、*Bibliografia literatury polskiej "Nowy Korbut"*, Tom 2: *Piśmiennictwo staropolskie* (Hasła osobowe: A-M), Warszawa 1964, s. 518-519 を参照。

7）Hans Rothe, “Über die Stellung Polens in der europäischen Kultur des 16. Jahrhunderts”, in: *Fragen der polnischen Kultur im 16. Jahrhundert*, Bd. 1(Bausteine zur Geschchte der Literatur bei den Slawen, Band 14, 1), hrsg. von Reinhold Olsch und Hans Rothe, Giessen 1980, S. 331-333.

8）『両サルマチア論』は、イタリア語に翻訳されて出版された最初のポーランド人の著作でもあった。Henryk Barycz, “Wstęp ”, do: Maciej z Miechowa, *Opis Sarmacji Azjatyckiej i Europejskiej*, Wstęp: Henryk Barycz, z języka łacińskiego przełożył i komentarzem opatrzył Tadeusz Bieńkowski, Posłowie: Waldemar Voisé, Wrocław-Warszawa-Kraków-Gdańsk 1972, s. 6〔以下、バリチの序文は *Wstęp*、この序文を含む書物全体に言及する場合には *Opis Sarmacji* と略す〕.

9）本稿で用いる『両サルマチア論』のテキストは、1517 年の初版（註 2 参照。*Tractatus* と略記）を基本とし、必要に応じて 1521 年版（註 5 参照。*Descriptio* と略記）をも参照した。引用・参照箇所は、巻・論考・章数によって表示する。なお、今回は、S. A. アニンスキーが校訂した次のテキストは、参照することができなかった。*Трактат о двух Сарматиях*, введение, перевод и комментарии С. А. Аннинского, Москва, Ленинград 1936. テキストの読解にあたっては、タデウシュ・ビェンコフスキによる現代ポーランド語訳（Maciej z Miechowa, *Opis Sarmacji*. 註 8 参照）を参考にした。また、『両サルマチア論』の地理的記述の解釈にかんしては、カロル・ブチェクの次の論文から多くを教えられた。Karol Buczek, “Maciej Miechowita jako geograf Europy wschodniej”, w: *Maciej z Miechowa 1457-1523. Historyk, geograf, lekarz, organizator nauki*, pod red. Henryka Barycza, Wrocław-Warszawa 1960, s. 75-165〔以下、*Miechowita jako geograf* と略記〕.

10）マチェイ・ズ・ミェホヴァ（ミェホヴィータ）Maciej z Miechowa (Miechowita)（c.1457-1523）は、ポーランドにおける初期ルネサンスを代表する人文主義者のひとりである。イタリアに留学して医学を学び、帰国後は医学、地理学、歴史叙述など多分野にわたって活躍した。また、クラクフ大学の学長職を数度にわたって務め、同時代人に「大学の支柱」と呼ばれた。ミェホヴィータの生涯については、Leszek Hajdukiewicz, “Maciej z Miechowa zwany Miechowitą”, *Polski słownik biograficzny*, Tom XIX (1974), s. 28-33; Henryk Barycz,“Życie i twórczość Macieja z Miechowa”, w: *Maciej z Miechowa 1457-1523. Hisotryk, geograf, lekarz, organizator nauki*, pod red. Henryka Barycza, Wrocław-Warszawa 1960, s. 15-73 を参照。

11）Barycz, *Wstęp*, s. 9-14; Buczek, *op. cit*., s. 101-110.

12）Barycz, *op. cit.*, s. 10-12.

13）Buczek, *op. cit.*, s. 106-107. ブチェクは、書物を献呈されたオロモウツ司教トゥルソヌスの人脈にも注意を向けている。ミェホヴィータはクラクフでトゥルソヌスの一族と親しく交際していた。他方、トゥルソヌス家はフッガー家と姻戚関係にあった。『両サルマチア論』が初版刊行の翌年にアウクスブルクで出版され、ただちにドイツ語訳された背景には、この両家の援助があった可能性が大きい。*Ibid.*, s. 103-105.

14）*Tractatus*, k. A1.

15）ポーランドにおける「新世界」認識にかんしては、拙稿「われらもまたインドに至らん――近世ポーランドにおける「新世界」認識とウクライナ植民論」、『人文学報』（京都大学人文科学研究所）、85（2001 年）、1-25 頁を参照。

16）I. 1. 1.

17）『プトレマイオス地理学』（織田武雄監修、中務哲郎訳）、東海大学出版会、1986 年、47-48 頁（第Ⅲ巻第 5 章「ヨーロッパのサルマティアの位置」）および 86-88 頁（第Ⅴ巻第 8 章「アジアのサルマティアの位置」）を参照。ただし、サルマチアの範囲について古代のすべての論者がプトレマイオスと一致していたわけではない。Henryk Łowmiański, *Początki Polski. Z dziejów słowian w I tysiącleciu n.e.*, t. I, Warszawa 1994, s. 142 を参照。

18）中世末期のプトレマイオスの復興がヨーロッパ東部の地理認識におよぼした影響については、Franciszek Bujak, *Studja geograficzno-historyczne*, Warszawa 1925, s. 16-25; Tadeusz Ulewicz, *Sarmacja. Studium z problematyki słowiańskiej XV I XVI w.*, Kraków 1950, s. 33-66; Karol Buczek, *Dzieje kartografii polskiej od XV do XVIII wieku. Zarys analityczno-syntetycznej*, Wrocław-Warszawa-Kraków 1963, s. 10-12, 17-23; Jadwiga Bzinkowska, *Od Sarmacji do Polonia. Studia nad początkami obrazu kartograficznego Polski*, Kraków 1994, s. 9-10, 13-25. 15 世紀後半から 18 世紀前半にかけて刊行されたプトレマイオスにもとづくサルマチア地図の書誌については、Lucyna Szaniawska, *Sarmacja na mapach Ptolemeusza w edycjach jego "Geografii"*, Warszawa 1993 を参照。

19）*Tractatus*, k. πv.

20）I. 2. 5.

21）*Ibid.* グリフォンの守る金銀と怪物人間が実在しないことは、1521 年版の末尾に付加されたヤン・ヘレル宛の書簡でも強調されている。*Descriptio*, k. H4-4v.

22）I. 2. 5.

23）II. 1. 3.

24）I. 2. 5; II. 2. 1; II. 2. 2.

25）ミェホヴィータのいう「経験」とは、彼自身の実地調査にもとづく知見ではなく、現地を知る人間からの聞き取りによる情報を指すと考えられる。1519 年、ヨーロッパ東部の地誌をめぐってフランチェスコ・ダ・コロとのあいだに討論がおこなわれたさい、ミェホヴィータは自分の見解が戦争で捕虜になったモスクワ人の証言にもとづくことを認めている。Władysław Pociecha, “Z dziejów stosunków kulturalnych polsko-włoskich ”, w: *Studia z dziejow kultury polskiej*, Warszawa 1949, s. 190-191.

26）Bolesław Olszewicz, “Geografia polska w okresie Odrodzenia”, w: *Odrodzenie w Polsce*, Tom *II: Historia nauki*, cz. II, pod red. Bogdana Schodolskiego, Warszawa 1956, s. 342-345.

27）I. 1. 7; II. 1. 3. プトレマイオスの記述では、ラー川（ヴォルガ川）はヒュルカニア海（カスピ海）に注ぐとされている。『プトレマイオス地理学』、87 頁、および 243 頁の地図を参照。したがって、これはミェホヴィータが新たに生み出した誤謬である。

28）『両サルマチア論』では、ヴィリニュス（ヴィルノ）、ノヴゴロドの 2 都市にかぎって緯度が示されている（それぞれ北緯 57 °、66 °）。II. 1. 2; II. 1. 3. 正確にはそれぞれ 54 °41'、58 °30' でなければならない。ミェホヴィータの経緯度認識については、Buczek, *Miechowita jako geograf*, s. 112-116, 159、地点間の距離の算定の誤差については、*Ibid.*, s. 116-118, 139-140, 160 を参照。

29）*Tractatis*, k.πv. ミェホヴィータは別の箇所でも「タタールがアジア・サルマチアすなわちスキティアに侵入し支配してから 306 年が過ぎた」と記している。I. 2. 1.『両サルマチア論』の執筆・刊行は 1517 年であるから、ミェホヴィータの計算に従えばタタールのサルマチア進出は 1211 年となる。実際にモンゴル軍が南ロシアに侵入し、カルカ河畔の戦いで圧勝したのは 1223 年のことである。

30）たとえば、「1228 年、タタールは大挙してルシ（Russia）に侵入し、リャザン地方を荒廃させ、公を殺害し、老人と子供を殺戮し、残った人びとを捕えて連れ去り、城を焼き払った」（I. 1. 2）、 あるいは、「タタールは、ヘンリク〔シロンスク公〕とポーランド人に大勝したのち、戦利品を略奪し、殺された者ひとりひとりから片耳を切りとった。そして、殺した者の人数を数えるために、大きな袋を 9 つ、〔耳で〕一杯にした。〔…〕彼らはレグニツァの周辺の村を破壊し、焼き払い、オトムホフの方に向かい、そこで 15 日間とどまり、周辺の地域全体を荒廃させた」（I. 1. 3）など。

31）I. 1. 5.

32）コサックについて、ミェホヴィータは、何者にも従属せず、数十人規模の集団で略奪しながら広大な平原で暮らしていると記している。I. 2. 3. こ

れは、活字刊行物におけるコサック社会の記述としては、最も初期のものに属する。Buczek, *op. cit.*, s. 149.

33）前述のように、ミェホヴィータはヴォルガ川も黒海に注ぐと考えていた。

34）I. 1. 7.

35）I. 1. 8. Buczek, *op. cit.*, s. 146 の指摘を参照。

36）I. 1. 8.

37）ミェホヴィータは、「習俗、言語、戦い方が同じであること」を理由に、トルコ人の祖先はタタールであると認識していた。I. 3. 1.

38）I. 1. 8; I. 3. 1.

39）ミェホヴィータはゴート人をゲタエ人（Getae）と同一視し、さらにポロヴェツ人（Polowcji）とも混同している。I. 2. 1. ミェホヴィータによるゴート人の東方起源論は、ゴート人のスカンディナヴィア起源を主張するヨハンネス・マグヌスとの論争を引き起こした。1521 年版にヨハンネスによる批判とそれに対するミェホヴィータの応答が付載されている。*Descriptio*, k. A2-A3v.

40）I. 2. 2.

41）この記述は事実に反する。フン族とハンガリー人（マジャール人）のあいだには直接のつながりは存在しない。

42）I. 2. 3.

43）この論法はミェホヴィータの独創ではなく、ヴィンツェンティ・カドゥベク（c.1150-1223）やヤン・ドゥウゴシュ（1415-80）の年代記にさかのぼるものである。荒木勝「ポーランドの建国伝承考――中世の年代記の比較を通して」、『ポロニカ』創刊号（1990 年）、155-173 頁を参照。

44）I. 2. 3; I. 2. 4.

45）I. 2. 3. 『両サルマチア論』におけるスラヴ人の系譜論は西スラヴが中心であり、ルシ人（Ruteni, Russitae）、モスクワ人（Moscovi）など東スラヴ諸民族の位置づけは曖昧である。Buczek, *op. cit.*, s. 82-83 を参照。

46）I. 2. 4.

47）Barycz, *op. cit.*, s. 7-8; Buczek, *op. cit.*, s. 82-83.

48）拙稿「サルマチア――ヨーロッパにおけるポーランドのトポス」、『洛北史学』2（2000 年）、18-24 頁を参照。

49）初版は 1519 年にクラクフで刊行されたが検閲により没収され、修正版が 1521 年に出版された。1521 年版については復刻版が刊行されている。*Chronica Polonorum*, Cracoviae 1521, rep. Kraków 1986.

50）Ulewicz, *op. cit.*, s. 63-65.

51）Martini Cromeri *Polonia* (1578), wydał Wiktor Czermak, Kraków 1901, s. 10.

52）Buczek, *op. cit.*, s. 108-109.

53）Olszewicz, *op. cit.*, s. 344-345; Buczak, *op. cit.*, s. 157. この書簡については、オットー・フラーケ『フッテン――ドイツのフマニスト』（榎木真吉訳）、みすず書房、1990 年、207-210 頁をも参照。

54）Claude Backvis, “Kopernik w swojej epoce i środwisku”, w: id., *Renesans i barok w Polsce. Studia o kulturze*, wybór i opracowanie: Hanna Dziechcińska i Ewa J. Głębicka, Warszawa 1993, s. 223-225.

55）ミェホヴィータは、モスクワ国家の都市の規模を記述するさいに、中欧（プラハ、ブダ）やイタリア（フィレンツェ、ローマ）の都市と比較している。II. 2. 1 これは、『両サルマチア論』がポーランド外の読者を意識しながら書かれたテクストであることを示している。

56）タタールについてこの表現が用いられている。I. 1. 5.

57）II. 1. 2; II. 1. 3.

58）ペレコプ（クリミア）・タタール、カザン・タタール、ノガイ・タタール。II. 1. 2; II. 1. 3.

59）II. 1. 3.

（京都大学大学院文学研究科助教授）